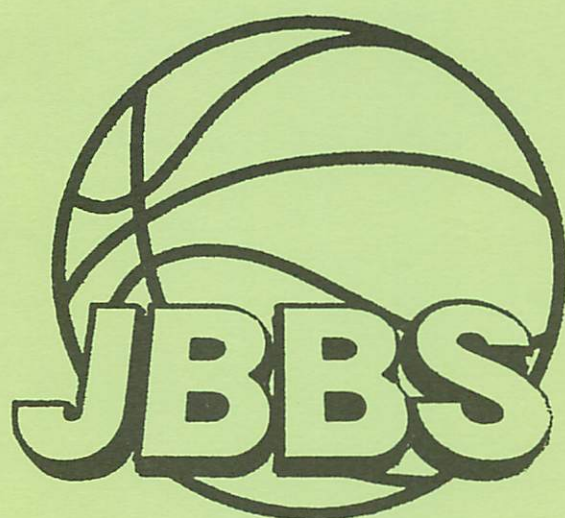


バスケットボールプラザ

Basketball Plaza

No:23



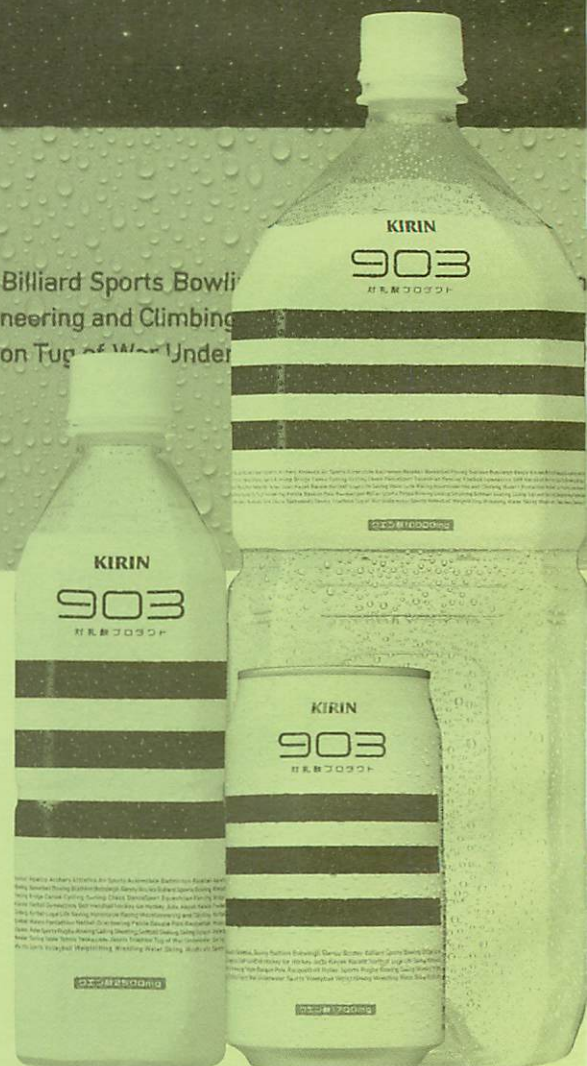
2004年4月

日本バスケットボール振興会

903

Automobile Badminton Baseball Basketball Boxing Biathlon Bobsleigh Bandy Boules Billiard Sports Bowling
Key Ice Hockey Judo Kayak Karate Korfball Luge Life Saving Motorcycle Racing Mountaineering and Climbing
ooting Softball Skating Skiing Squash Surfing Table Tennis Taekwondo Tennis Triathlon Tug of War Under

対乳酸にはクエン酸。



スポーツのライバルは乳酸だった。アディダス ジャパン 共同開発プロダクト。キリンビバレッジ

目 次

○ 平成16年春季理事会報告概要	3
○ 特 集	
盛り上げよう日本のバスケット	広報部 12
—— 現場第一線記者に訊く ——	
○ 特別寄稿	
100万人の大歓迎	諏訪 俊二 18
○ アメリカ・バスケットボール界の組織形態	山本 哲哉 21
○ 風神雷神	
代表選手はもっと自覚を	井上 一男 25
○ 全日本女子代表オリンピック出場権獲得	
杜の都に感動をみた	日比野 明 27
全員バスケットの勝利に感動	実吉 純彰 29
仙台・熱烈応援席	渋谷美由紀 31
○ 男子日本代表候補選手強化スタート	広報部 33
○ 会員だより	
バスケットボールと私	小山ひろみ 35
過去・現在・これからもずっと!	田仲小枝子 37
○ 追悼の記	
故黒川義雄さんを偲ぶ会盛大に開催される	広報部 39
黒川義雄先輩と私	住田 正二 41
黒川義雄氏を偲んで	富士 秀雄 42
黒川義雄先輩を偲んで	浅野 義尋 43
尾崎信幸氏に捧ぐ	豊田 治視 45
○ 訃報	46
加藤覚君を偲んで	住田 正二 46
○ 事務局だより	48
○ プラザ こぼればなし	49

特 集

盛り上げよう日本のバスケット

—— 現場第一線記者に訊く ——

担当：広報部会

バスケットは、何故もっとマスコミにとりあげられないのだろう？ という素朴な疑問は日頃誰もが抱かれている問題と思われます。

今回は、バスケット担当として現在第一線でご活躍中の記者の方々をお招きして、その辺の事情やお考えについてお伺いしながら意見交換をさせていただく機会を得ましたので、以下にご披露いたします。

私たちの「日本のバスケットをもっともっと盛り上げたい」という強い思いを一步一步実現していくためには、こうした現実の諸事情をも充分踏まえる必要があろうかと思われますのでご参考にしていただければ幸いです。

出席者	読売新聞社運動部記者	千葉 直樹 氏
	時事通信社運動部記者	小松 将之 氏
	広報部	大塚、黒川、壁谷、坂本、小澤

日 時 平成 16 年 4 月 12 日

オリンピック出場

広報部 本日はお忙しいなかご出席いただき有難うございます。私たちはバスケットボール界の振興後援団体として、いろいろな面から日本のバスケットを盛り上げようと自主的に活動している会です。バスケットの情報がより多くマスコミに取りあげられ、テレビや新聞紙面を賑わすようになることもメジャー化に向かうひとつの大道だと考えますが、まず私たちとしてはどのように考えて、工夫努力することが良いのか、といった点につき率直なご意見を伺いたいと思います。

記 者 1月に仙台で開催された女子アジア選手権で韓国に勝ってアテネオリンピック出場権を獲得しましたが、いつもバスケットの記事は記録しか載らない殆どのスポーツ紙が、1面から大々的に取りあげて報道しました。特にオリンピックに出場するということは、マスコミが積極的に取りあげやすい出来事なのです。

選手を鍛えて日本代表チームを強くし、常にオリンピックに出場するのは勿論大変重要ですが、選手を鍛えるために国内最高レベルのリーグを活性化してゲーム数を増やし、その中で育成するののひとつの方法ではないでしょうか。

日本のトップリーグはNBAなどと比べるとゲーム数が少ないですね。男子は今シーズンから各チーム当たり7ゲーム増やしましたが、それでも少ないと思います。現状でゲーム数を増やすことは、企業の負担も大きくなって大変なのかもしれませんが、もう少し多くてもいいのではと感じます。

記 者 マスコミではどうしてもオリンピック絡みの方が記事として載せやすいです。バ



スケットに関する主な記事としては、ここ4～5年企業のリストラによる休廃部の問題が多かったように思います。サッカーJリーグのように、地方の開催でも盛りあがって観客が多くつめかけるようでない、報道としてもなかなか取りあげにくいです。

昨今のバスケットスーパーリーグやWリーグは強弱が大体はっきりしていて、新鮮味が乏しいですね。マスコミの記事になるには記者が直接現場に行って取材する必要がありますが、インカレなどは殆ど行きませんし、JBLが細かいインフォメーションなどを送ってくれましても、紙面にはあまり反映されません。したがって結果のスコアだけを掲載することになってしまいます。それよりもリーグを活性化したり、新しい注目選手を育てたりする方が記事になると思います。

スター選手の発掘

記者 スター選手を生み出すことも必要で、少々強引でもやった方がいいと思います。

私はバレーも担当していますが、バレーは世界的な大会を日本で開催し、それをテレビと組んでゴールデンタイムに放映し、強引にスター選手を作っています。先般のワールドカップでも、最近話題になっている女子の“19歳コンビ”や、若いタレントをゲストとして呼んだ応援方法などで、プレイ以外でも注目度を上げようとしています。

手法の良し悪しはともかくとして、テレビという媒体を通じてバレーそのものを一般に認知させていますので、結果的に選手の知名度も上がり、ファンが増えるというサイクルになっています。バレー会場に来ている観客層をみると、30代40代の女性がかかなり多いですし中高生も相当きています。中年の女性が多いことは、少し前の中垣内選手や川合選手らのファンだったのではないかと推測されますが、今でもそれを上手く引きずっているといえます。

バレーがテレビと組んで良い時間帯に放映し、会場に多数のファンを呼び寄せられるのは過去の遺産があるからだと思います。東京オリンピックを始めとして、メキシコ、ミュンヘン、モントリオールとメダルを取っている実績が大きいです。

残念ながらバスケットにはそういう形の過去の遺産がない点が弱いところですね。バスケットの会場に来ている観客は本当にバスケットが好きで見に来ている人が多いし、スポーツを見る目としてはバスケットの方が正当なのかも知れませんが、動員力の方は欠けています。ミーハー的なバレーの方が一般的に親しまれて観客が集まっているようで、その点バスケットは一般観客(大衆層)への広がり不足しているように思われます。

先日のWJBL決勝戦とかオールジャパンの決勝とか、結構観客が集まって満員になるときもあるのに、それがコンスタントでないところが問題でしょうね。

広報部 バレーは「ママさんバレー」の組織を活用して観客が動員されていると聞いています。バスケットでも「ママさんバスケット」があるのですが動員面では弱いようです。

記者 ママさんバスケットのチーム数はどれくらいあるのですか？

広報部 ママさんバレーは全国に約9000チームあるようですが、ママさんバスケットのチーム数は約360チームですので、底辺の差異もあるかと思います。

記者 バスケットでもミニバスなどはチーム数も多く全国大会も盛りあがっていますよ

ね。この辺はバレーより凄いところだと感じています。
広報部 バスケットの競技人口は結構多いのに、それが各層に幅広く浸透していないのが弱点です。

トップリーグの活性化

記者 今年のJBLのベスト4をみると首都圏にいるチームは東芝だけ、東京とその近辺に強いチームがいないのも盛り上がらない一因ではないですかね？

JBLが制度化しているホームタウン方式はいい制度だと思うのですが、実際にはそのホームタウンの試合数にばらつきがあったりして、今ひとつ徹底してないですね。

記者 最高リーグの活性化は非常に大事な問題だと思います。ひとつの活性化方策としてプロ化があり、最近では企業の意向もあってすぐには無理なようですが、それでもプロ化は前向きに考えたほうが良いと思います。以前プロ化志向がかなりあったのに残念なことです。当面は少しでもプロに近づく形にしていってほしいと思います。

記者 そうですね。現状のようにその場しのぎのやり方では前進しないのではないのでしょうか。プロ化すればチームがもっと強くなり、バックアップする企業名も、大きくマスコミに取りあげられるというメリットもあるのですが、昨今の経済環境を考えれば、おいそれとは手を出せない。

記者 サッカーではチーム名に企業名を出してはいけないルールになっていますが、実際には企業が投資してやっていますし、その企業名も知られています。協会が強力なリーダーシップを発揮して全体を引張っているのが強みなのですが、サッカーの場合でも最初は大赤字の連続で、黒字になったのはここ2～3年のことです。

鹿島アントラーズを例にとると、住友金属がバックアップして地域の活性化も含めてやったところうまく成功し、地元では“自分たちのチームができた”と地域住民も盛り上がるし、マスコミも大いに取りあげるといふ好結果につながっています。

記者 新潟アルビレックスなどもなかなか面白いやり方をやっています。地元新潟ではサッカーもバスケットも動員力があって盛り上がっています。

広報部 記者の方々が主に取りあげられるとすればどのレベルのバスケットでしょうか？

記者 やはりトップリーグですね。あとは高校生の大会など。高校生の大会は野球の甲子園のように盛り上がりもあるし観客も多いですから、毎年それなりに掲載スペースがあります。それらに比べて大学の試合は殆ど見に行きません。レベル的には大学の方が上だと思いますが、不思議なことにあまり興味がありません。やはり高校生の大会の方が記事になる要素が多いですね。

広報部 昔は関東レベルの大会でも新聞に詳しく結果が掲載されたものですが、最近掲載されないのは何故でしょうか？

記者 スポーツ界全体のバランスから関東のレベルまでは掲載されません。スポーツの紙面は以前よりかなり広がっているのですが、それだけ競技種目も増えているので全国レベルでないと対象になりません。現在テーブルスコアを掲載しているのはサッカーと野球ぐらいで、他のスポーツ種目は殆ど試合結果だけとなります。

広報部 バスケットもミニバスなどは相当な競技人口なのに、あまり記事にならないよう



ですが？

記者 競技人口が多いことと、記事になるということとは別です。要は注目度で、例えば男子バスケットのトップリーグでみますと、現行の企業チームに採用される選手は大学卒で、高校卒は見当たりません。高校卒でもいい選手だったら、若いうちからトップリーグへ入れて、どんどん伸ばしていくことも注目を浴びる要因となるのではないのでしょうか。最近ではNBAでも高校卒の選手が活躍していますし、高校卒の選手でも日本代表に選ばれるような道筋をつけたら面白いと思いますね。

日本代表チームについて

広報部 最近男子の日本代表チームのヘッドコーチ・パブリセヴィッチ氏が、若い選手にも目を配って強化していますので、やがては高校卒の選手も代表選手に出てくるのではないのでしょうか。

記者 日本代表選手の強化という面では、日本国内で開催される国際大会が少ないように思われます。定期的にはキリンカップぐらいで、あとは殆ど海外遠征になってしまいます。国内で開催することによって選手のステータスをもっと高め、代表選手としての自覚を促し、戦う姿勢をアピールすれば注目度も違ってくるでしょう。

記者 パブリセヴィッチ氏は一生懸命強化に取り組んでいると思います。問題は選手を出しているチーム側にあるのであって、JBLも大学もリーグ戦が始まる前から選手を抱え込んでしまって代表チームの練習に出さないことがある。

各チームとも負けるのがイヤだから良い選手を送らない、代表選手なのに代表としての練習が少ないからいつまで経っても強くならない、という悪循環があると見えています。サッカーのように成熟した選手ばかりなら、集まってすぐに国際試合でもできるでしょうが、バスケはそうはいかない。この辺にも問題があるのではと思います。

広報部 記者の皆さんが試合会場へでかけたり、記事にされたりする目安のようなものがあるのでしょうか？

記者 そういうものは特にありませんが、単なる勝ち負けや、そのスコアだけでは記事になりません。記事にするには切り口となる“話題性”が重要で、選手の特異な経歴とか、面白いスター選手などがその切り口となります。

記者 バスケを担当している記者は、どこの社でも他の競技と掛け持ちですので、なかなか連続して会場に足を運べません。継続して見ていないと話題性のある記事は書けませんし、たまに書いても掲載記事にもならないのです。

広報部 バスケはおっしゃるような“話題性”に乏しいのでしょうか？また、どのような話題が魅力的なのでしょう。

記者 記事になるのはなんといっても“話題性”です。よく細かい試合戦評等を送っていただきますが、なかなか紙面には反映できません。それよりも各チームから選手の特徴や珍しい話などを知らせてもらった方が役に立ちます。過去アメリカに挑戦した日本人選手が何人かいますが、そういう選手の話の方が注目される話題性があります。田臥選手がトヨタに入ったときは大いに話題性をまき起こして良かったのですが、すぐにいなくなってしまう残念でした。

記者 外国でプレイしている選手が日本に戻って代表チームでプレイすることは、サッ

カーの中田選手のようにかなり注目を集めると思います。そういう意味では日本人選手がアメリカなどの外国へ行って活躍するのはいいことだと思います。例えば、田臥選手が日本代表でプレイしたら大きな話題性がありますね。ただ、外国へチャレンジ修行に行くためのルートがはっきりしていませんから、そういう選手がなかなか出ません。できたら外国へ挑戦するような選手の情報なども欲しいですね。

情報の発信

記者 チームからいろいろと情報をもらったからといって必ず記者が食いつくかどうかわかりませんが、情報がないよりも提供してもらった方がいいと思います。もう少し情報があればなかには食いつけることもあるのではと思います。サッカーなどは、選手に子供が生まれたことまで情報として発信してくれます。



選手の出入りとかも含めてシーズン節目のときは是非とも情報ををいただきたいですね。

先程も言いましたが、担当兼任記者が殆どですので、記者会見をやっても必ずしも出席できない場合があります。ましてや東京以外にいるチームは取材しにくいので、FAXで結構ですから情報発信をお願いしたいです。プロ野球やサッカーには専任記者がいますが、バスケットはいませんので、専門誌を見て始めてわかるといったような情報もあります。

広報部 協会やJBL、WJBLなどからの情報はどうでしょうか？

記者 全日本代表の動きなど、最近はインターネットを含めてよく情報を流してもらっていますので、そこを見れば記事も書けます。特に全日本女子はオリンピックに出場するというので、専任広報担当をおいて情報を発信してくれていますので助かっています。

反対に各チームの情報は皆無に近いので、その辺が話題性に欠けます。例えば、新潟アルビレックスは地元のマスコミにはよく取りあげられていますが、東京にまでは情報が届きません。やはり地元と東京のそれぞれで取りあげてもらった方が全国的にも周知できます。

広報部 今回女子がオリンピック出場切符を獲得しましたが、話題性としては如何ですか？

記者 良かったと思いますが毎回オリンピックに出るようでないといけませんね。女子について言えば、1996年のアトランタに出場した後、2000年のシドニーには出場できませんでした。1度出場を逃がしてしまうと8年という期間が過ぎますので、どうしても忘れられてしまいます。今回はそれだけに余計注目されたのだと思いますが、やはり連続してオリンピックに出場した方が記者として食いつきやすいです。

そんなわけで女子はまあまあですが男子はまだまだですね。男子も女子と同じように頑張ってくるとマスコミの注目度も相当違ってくると思います。代表チーム

がある程度強くなって注目を浴びないと話題性は長続きしませんね。

サッカーを例にとっても言えば、Ｊリーグの試合はあまり見ないのに、日本代表チームが出る試合は公式戦でなくても見るという人が多いです。テレビでも結構取りあげて放映したりしますから。海外では歴史のある国内リーグの人气が高く、代表一辺倒という傾向はありませんが、サッカー文化が成熟していない日本では、代表チームが注目されることは大事です。

広報部 代表チームの強化につなげる意味で若い選手を一貫して育成強化するため、協会は専任コーチを採用して、中高校生を全国的に同じレベルで育成する施策をとっています。

記者 エンデバー制度を中心に、一貫強化の枠組み作りが始まりましたが、バスケットの場合、特にバレーボールなどとの間で長身選手の争奪戦が激しいという話も聞きます。好素材を早い時期にこちらの土俵に引っ張り込めるかどうか重要な要素です。

振興会のこと

広報部 最初に振興会のことを説明しましたが、他のスポーツ団体でそのスポーツの普及、発展を応援するような組織はありますか？ 振興会について一言お願いします。

記者 他のスポーツであまり聞いたことはありません。振興会はバスケットの先輩方の集まりで、経験もあって知識や実績を持っている方々が多いと思いますので、もっと活躍されてもいいと思います。協会もこういう貴重な組織を活かさない手はないと思いますし、振興会としても協会と連携をとって活動されたら、バスケット界のために大いに役立つのではないのでしょうか。また、先輩の立場から協会に対して率直に話しのできる団体があってもいいかと思います。外野ならではの建設的な意見も貴重なことですから。

記者 ２００６年に世界選手権が日本で開催されますが、このように大きな大会は運営ひとつとっても大変難しいことで、平素時間をお持ちの先輩方が経験を生かして協力されるのもひとつの方法ではありませんか。

広報部 私どもの会報「バスケットボールプラザ」なども情報源のひとつとしてお送りしたいと思いますが？

記者 送っていただければなにかと役に立つと思いますし、振興会の理解にもつながると思います。

広報部 これからも記者の方々と交流する機会をできるだけ多く持ちたいと思っております。

記者 交流について言えば、こちらから要求するなどということはできませんが、協会を含めて交流の機会は平素からあったほうがいいですね。顔見知りになることで気さくに話も聞けますし、そのことが話題性をもたらす結果になることもありますので。

広報部 本日はお忙しいところ大変有難うございました。また機会を設けたいと思いますのでその節はよろしくお願いいたします。

特別寄稿

100万人の大歓迎

—— 「スペシャルオリンピックス」をご存知ですか ——

諏訪 俊二

ダブリンの世界大会に出場しました

アイルランドでは古いケルト人の言葉として、最大級にもてなすことを「100万人の大歓迎」と表現するそうです。昨年の6月スペシャルオリンピックスの世界大会がアイルランドの首都ダブリンで開催され、幸運にも日本のバスケットボールチームのコーチとして参加し「100万人の大歓迎」を味わってきました。

この大会は166ヶ国およそ7000名の選手と3000名のコーチが参加し、それに競技役員を始め、3万名のボランティアがあらゆる持ち場で働く、この年世界中で最も大規模なスポーツイベントとなりました。

開会式と閉会式は10万人収容のゲーリックフットボール（アイルランドで最も盛んなスポーツで他の国では殆ど行われない）専用スタジアムを超満員にして挙行されました。

日本選手団は全部で53名の選手が、陸上競技、水泳、バスケットボール、サッカー、バレーボール、卓球、体操、ボウリングの8種目に参加しました。

ところで皆さん「スペシャルオリンピックス」ってご存知ですか？こんな風に聞かれますと、「知ってますよ、パラリンピックのことでしょう」と言われることが多いのです。

来年、長野で冬季世界大会を開催します

来年2月、長野で80ヶ国、2000名の選手を集めて冬季世界大会を開催します。このプレ大会として国内大会が開催されたため、メディアにもいろいろ取り上げられ、ご覧になった方も多いとは思いますが、まだまだスポーツ関係者も知らない方が多いように思います。

この機会にバスケットボール関係者にも「スペシャルオリンピックス」のことをご理解いただき、一人でも結構ですからボランティアとして一緒にバスケットボールを楽しむ方が出てきてもらえれば幸いです。

「知的発達障害のある人たち」のスポーツ団体です

アメリカのケネディ元大統領の妹であるユニスさんが提唱して始めた、知的発達障害のある人たち（いわゆる知恵遅れといわれる人たち）のスポーツ団体で、35年の歴史があります。日本ではかなり早くからこの活動に参加したのですが、いろいろな問題が生じたため国内の組織は解散してしまい、10年ほど前に新しい組織ができました。私は縁あってそのときからこの活動に参加し、バスケットボールだけでなく、いろいろなスポーツを彼らと一緒に楽しんでいます。

世界大会はオリンピックと同じように夏季、冬季とも4年ごとに開催します（オリンピ

ックイヤーの前年)。バスケットボールの大会参加は、新しい組織になってからは初めてのことでした。それだけに様子の分からないことが沢山あり不安でもあったのですが、ダブリンの人たちの献身的なサポートに助けられ、無事に1週間の大会をこなすことができました。

銀メダルに輝きました

さて日本チームの戦績は何と銀メダルを獲得したのです。日本チームの参加した男子シニア（22歳以上、女子の参加も可）は、36チームですから銀メダルなど獲れるはずがありません。しかし間違いなく銀メダルに輝いたのです。このところがスペシャルオリンピックスのスペシャルオリンピックスたる所以です。ではどうして銀メダルが獲れたのでしょうか。それはディビジョニングという制度があるからです。

ディビジョニングの発明

スペシャルオリンピックスは35年の歴史の中で、知的発達障害のある人たちがどうしたら自分たちの能力の限界に挑戦することができるかを探ってきたのです。その結論がディビジョニングです。スペシャルオリンピックスで行う全ての競技は、参加者を単に年齢や、性別に分けるだけでなく、その人の現在の能力を測りそのレベルに応じてグループに分け、ほぼ同じクラスのチームや個人同士で競技を行い、順位を決めるというものでトップアスリートを決める大会ではないのです。この点がパラリンピックとの大きな違いです。

バスケットボールのようなチーム競技は、チームの実力をあらかじめ知り、グループ化することは難しいのですが、個人記録を事前に提出し大会前半で行う予選（テストマッチ）によってグループ分けをします。日本チームは9つのグループ中8番目の4チームグループに入り、その中で2位となったわけです。したがって同じくらいの実力のチームとしか対戦しないため、日本チームの実力が世界大会で通用するだろうかとか、1回戦で負けてしまったらおしまいなどという心配はしなくてもいいわけです。とは言っても実際の試合は真剣そのもので、どのグループのチームも実力伯仲、好試合の連続でした。

バスケットボールにも個人種目があります

バスケットボールに限らず、チーム競技には必ず個人種目の競技があります。スペシャルオリンピックスの日常トレーニングに参加する人たちの大部分は、競技のルールを正しく理解できず、またゲームをするだけの技術も持っていません（敵味方の概念をもてない人も少なくありません）。こうした人たちのためにバスケットボールの場合、パス、ドリブル、シュートの3種目の個人競技があり、大会にも参加できるのです。

その他いろいろな工夫をして練習や大会をやっていますが、恐らく誰が見てもこれ以上下手なバスケットボールはないと思います。

私もこの活動にかかわった当初、彼らが自分たちでバスケットボールのゲームができる日は決して来ないと確信しました。しかし、1年たって1年前を振り返ってみると、個人差こそあれ誰もがそれなりに進歩しているのです。その積み重ねでもう8年が経ちました。

皆と一緒にコート周囲をランニングさえできなかった子供たちが、いつの間にか列の中で走っているのです。これは彼らにとっては大きな進歩と言わなければなりません。

スペシャルオリンピックスは信じているのです

どんな障害があろうとも、日常のトレーニングと適切な指導と励ましがあれば必ず進歩します。

スペシャルオリンピックスをご理解いただき、この活動に興味のある方は下記までご連絡ください。どなたでも大歓迎です。

連絡先 : スペシャルオリンピックス日本・東京 電話 03-3615-5569
E-mail sontokyo@gol.com

[元三井生命女子コーチ]

※この特別寄稿は、上谷理事のご紹介でいただいたものです。[広報部]

アメリカ・バスケットボール界の組織形態



山本 哲哉

<特徴>

1. バスケットボール発祥の地であり、世界で最もバスケットボールの発達したアメリカでは、プロからアマチュアまで非常に数多くの組織が設立されている。
2. アメリカには日本を始め世界各国のNF(国内協会)が持っているような性格の国内統括団体はない。
3. FIBA(国際バスケットボール連盟)に対してアメリカを代表する国内協会はUSAバスケットボールであるが、この協会の主たる役割はオリンピックや世界選手権を始めとする国際大会に参加するアメリカチームの編成、強化、派遣であり、通常各国の国内協会が行う普及事業ではない。普及事業は、それぞれのレベルでその組織が行っており、同時に国内の強化活動も行っている。
4. 現在はオリンピックにプロ選手も参加が認められているため、NBAも加盟団体のひとつとして名を連ねている。
5. プロから大学、高校などそれぞれに組織があるが、どれも組織的、財政的にも完全に独立して運営されている。
6. メジャー大学バスケットボール界を統括するNCAA(後記)ではバスケットボールはビッグ・ビジネスであり、そのテレビ放映権から得られる収入は莫大な額である。そのNCAAの中でも各カンファレンス(リーグ)が独自にリーグ戦を運営し、収益を得ている。大学の規模によって3つのディビジョンに分かれていて、それぞれで全米選手権を開催している。
7. 普及事業はAAU(後記)が行っていると言ってよく、若年層の年齢別全国大会を開催し、才能の発掘を行っている。このAAUはかつてアメリカを代表する国内団体としてFIBAに認められていた時期もあった。現在NBAで活躍している多くのプレイヤーたちがAAU(後記)でのプレイ経験者たちだ。
8. NBA以外のプロ団体の組織は、どれもNBA人気に圧倒され、不安定な苦しいリーグ運営を強いられている。USBL(後記)などはシーズンを夏に限定して行っている。

<プロ>

NBA(National Basketball Association)

アメリカ・プロ・バスケットボールの老舗。1946年設立。8チームでスタートしたリーグは、現在では29チームにまで拡大された。1984年に現在のデイビッド・スターン氏がコミッショナーに就任して以来繁栄の一途を極めており、彼の描く世界戦略はヨーロッパを皮切りに文字通り全世界に展開されている。世界で最も成功したプロスポーツ組織とも言われ、他のスポーツ団体からその運営形態をモデルとされている。

NBDL(National Basketball Development League)

NBA直轄の選手養成リーグ。NBAに昇格するための実力をつけるだけでなく、プロ選手としての心構えや、社会人としての必要な教育を行っている。

WNBA(Women's National Basketball Association)

NBA直轄の女子リーグ。夏に限定してリーグ戦を開催しており、オフシーズンには海外でプレイすることが許されている。リーグ設立当時はマスコミにも多く取り上げられ、ファンの支持を得たが、近年は観客動員数が激減し、経営基盤が揺らいでいる。チームの解散や、移転が増えておりリーグ運営の建て直しが急務となっている。

CBA(Continental Basketball Association)

以前はNBA公認の選手養成リーグとしての地位を確立し、CBAからNBAに引き上げられる選手やヘッドコーチ(フィル・ジャクソンやフリップ・サンダースなど)を多数輩出したが、90年代後半からフランチャイズの経営基盤が大幅に弱体化した。90年代前半最大16もあったチーム数も今や7チームのみとなった。選手もNBAのスカウトにアピールするあまりに、個人プレイに終始したため、チームバスケットボールとしての面白さがなくなり、ワンオンワンのみの退屈な試合展開でファンを失望させた。一度は現ニューヨーク・ニックスGMを務めるアイザイヤ・トーマスがリーグを買い取り経営改革に乗り出したが、彼がNBA復帰のためリーグを手放すと一気に倒産状態にまで陥った。現在7チームでなんとかリーグ存続は果たしているが、NBDLができた以上、選手養成リーグとしての意味はあまりない。

ABA(American Basketball Association)

NBAの対抗リーグとして設立されたが、1976年に数チームがNBAに吸収され、その幕を閉じた。「Dr.J」ことジュリアス・アービングやデイビッド・トンプソンなどスーパースターを獲得し、対抗リーグとして善戦したが、観客動員数やテレビ放映権で老舗NBAに及ばず、遂に力尽きてしまった。70年代前半にNBAとABAのオールスター・チームが来日し、日本で初めて生で見せる本場アメリカのプロの技は日本のバスケットボール・ファンを魅了した。2000年に復活したが昨年は再び経営不振に陥り休止し、今シーズン再開した。フランチャイズのひとつであるロングビーチ・ジャムは、新潟アルビレックスが出資して運営しているチームであり、そのチームで田臥がプレイしている。

USBL(United States Basketball League)

リーグ戦の期間を4月～6月に限定したプロリーグ。今年19年目を迎えるこのリーグは、11チームで構成され、レギュラー・シーズン30試合を戦う。NBAを目指して頑張っている森下選手などがこのリーグでプレイしたこともあり、1985年のリーグ設立以来145人もの選手をNBAに送り込んだ実績を持つという。NBAの往年の名選手であった“タイニー”アーチボルドやリック・バリーもこのUSBLでコーチをしたことがある。

<大学>

NCAA(National Collegiate Athletic Association)

アメリカの大学スポーツの総本山で、3つのディビジョンから構成される。全てのディ

ビジョンで総数36万人近い学生アスリートが登録されている。バスケットボールのディビジョン1は31のカンファレンスで構成され、プラスどこにも所属しない独立校4校があり、合計330近い大学が加盟している。全米大学チャンピオンを決めるNCAAトーナメントの第1回大会は1939年に開催された。毎年3月に行われ、全米のファンを釘付けにするこのNCAA選手権は、入場料収入、テレビ放映権料などを出場校に分配した後、この大会のみで約700万ドルの収入がNCAAに入るという大規模な大会である。USA Basketballの現会長はこのNCAAで執行副会長を務めるトム・ジャーンステッド氏である。

NAIA(National Association of Intercollegiate Athletics)

1940年創立。バスケットボールの発案者であるジェームス・ネイスミス博士が発起人の一人となり設立に尽力した。NCAAに加盟していない小さな大学で構成されている。単科大学や、学生数が2000～3000ぐらいの規模の大学が大半を占めている。日本で80年代後半に毎年春の連休中に開催された「国際スポーツフェア」という大会に、このNAIAの優勝校が招待され、全日本と対戦したこともあった。このNAIAの全体的なレベルはNCAAならディビジョン2の中間くらいからディビジョン3ぐらいのレベルと言われている。しかしNAIAの優勝校が全日本と対戦したとき、その実力は伯仲しておりレベルの高さがうかがわれた。

NJCAA(National Junior College Athletic Association)

1938年に創立された2年制のコミュニティ・カレッジや短期大学の組織である。バスケットボール選手にとってこの2年制大学の持つ意味は大きく、バスケットボール選手としての能力は高く評価されているが、学業面での成績がNCAAの基準に満たない選手が、2年制の大学で成績を上げ、3年からNCAAの4年制大学へ編入するためだ。1968年のメキシコ・オリンピックで活躍し、後にNBAでもスターとなったスペンサー・ヘイウッドは短大時代に全米代表に選ばれ、オリンピック後そのままプロ入りした。全米の503校が加盟し、男子15、女子12のスポーツを統括しており、約45300人の選手が登録している。1969年以来事務局長を務めているのはFIBAの会長も務めたジョージ・キリアン氏である。

<高校>

NFHS A(National Federation of State High School Associations)

日本でいう高体連にあたる組織。しかし、体育だけではなく、音楽・芸術活動も統括するこの団体に、全米17346の高校が加盟し、運動部などの課外活動に参加する約1000万の高校生が登録している。

<その他>

AAU(Amateur Athletic Union)

1888年に創立されたこの団体は、日本でいえば日本体育協会のような組織で、アマチュア・スポーツの普及・発展、そして国民の健康増進、体力向上などを主な事業とする。特に若年層の普及・強化を中心に活動している。このAAUは1934年にアメリカがFIBAに加盟した際、アメリカのアマチュア・バスケットボールを代表する国内統括団体であ

り、長くその実権を握っていた。1978年の「アマチュア・スポーツ条例」制定後は、オリンピック活動の場をアメリカ・オリンピック委員会に譲り、現在はアマチュア・スポーツの普及・発展のための草の根活動に専念している。1996年、その拠点をフロリダ州オーランドに移し、ウォルト・ディズニーとタイアップして40以上の全米規模の大会をウォルト・ディズニー・スポーツ・コンプレックスで開催している。

NWBA(National Wheelchair Basketball Association)

車椅子バスケットボールの全米組織。

U S Armed Force

アメリカ国防総省に属する陸、海、空軍、海兵隊、沿岸警備隊で兵役に従事する軍人のためのスポーツ・プログラムを統括する。軍隊スポーツ評議会という組織が運営し、スポーツを通じての国際交流、友好推進を目的とする。いくつかの技術的レベルに応じてのスポーツ・プログラムを運営するが、最高レベルではオリンピックやパンアメリカン大会などの国際大会で活躍する選手を支援する。バスケットボールにおいては、かつてはオリンピック・バスケットボールの全米代表選手も選ばれており、1968年のメキシコ・オリンピックで優勝したアメリカチームには3人の軍人プレイヤーがいた。NCAA所属の軍士官学校でプレイした選手が、そのままプレイするケースが主なのでレベルは相当高い。

<アメリカの国内統括団体>

U S A Basketball

アメリカを代表するバスケットボールの国内統括団体。前身はABAUSA(Amateur Basketball Association of USA)。1989年FIBAがプロ選手のオリンピック参加を認めたのを機に、NBAもその加盟団体の一員となり、名称もUSA Basketballと改めた。オリンピック、世界選手権、パンアメリカン大会、ユニバーシアードなどの主要国際大会においてアメリカチームが優勝するためのチーム編成、強化、派遣を目的としている。1974年に前身であるABAUSAが設立されるまで、アメリカ国内では様々な団体がFIBAやUSOC(アメリカ・オリンピック委員会)に対しての代表権を争った。その代表権とは、すなわちオリンピックなどの国際大会に出場するアメリカチームの選手、スタッフ選考権のことである。特に1960年代になって、AAUと他のバスケットボール団体との抗争は激化し、NCAAを中心としたBasketball Federation of USA(BFUSA)が組織され、FIBAにその代表権を主張し、仲裁を求めた。1972年のミュンヘン・オリンピック直前にFIBAはAAUの代表権を無効にしたが、その国内紛争にうんざりしたFIBAはBFUSAにその代表権を与える代わりに、アメリカ国内で解決するように勧告。1974年NCAAやNFSA、そしてAAUなどアメリカ国内全てのバスケットボール団体を含めた新組織ABAUSA(Amateur Basketball Association of USA)が設立され、晴れてアメリカを代表する国内統括団体として認められた。翌1975年1月1日、イリノイ州ジャクソンビルに初代事務局長ビル・ウォールを迎え正式に活動を開始する。1979年にアメリカ・オリンピック委員会の拠点であるコロラド州コロラドスプリングスに本部を移転。現在はNBAやNCAAなど議決投票権のある14の団体で構成されている。

[振興会々員]

Molten®

INNER FIRE

情熱とは、あなた自身の内なる炎。
一途にトレーニングに励むときも、
戦いに敗けても挫けず
何度も果敢に挑戦し続けるときも、
熱く、まばゆく燃え続ける。
熾烈な戦いのなかで、
すべての敵を焼き尽くしてしまうまで。



- F I B A (国際バスケットボール連盟)主催国際大会唯一の公式試合球/男子
- JABBA (日本バスケットボール協会)主催大会公式試合球/男子
- J B L (バスケットボール日本リーグ機構)主催大会唯一の公式試合球
- W J B L (バスケットボール女子日本リーグ機構)主催大会唯一の公式試合球
(2003 - 04シーズン)

MTB7AT 7号球 ¥9,240(本体価格¥8,800)

国際公認球・検定球・貼り・天然皮革・ワイドチャネル
(表記の価格はメーカー希望小売価格)

ハ詩 (はちうた)
BISTRO HACHI-UTA

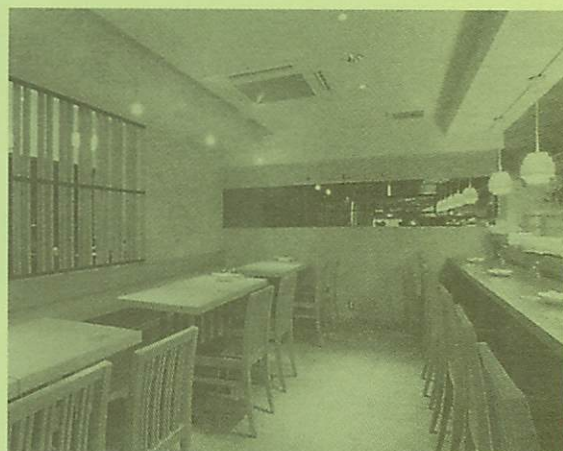
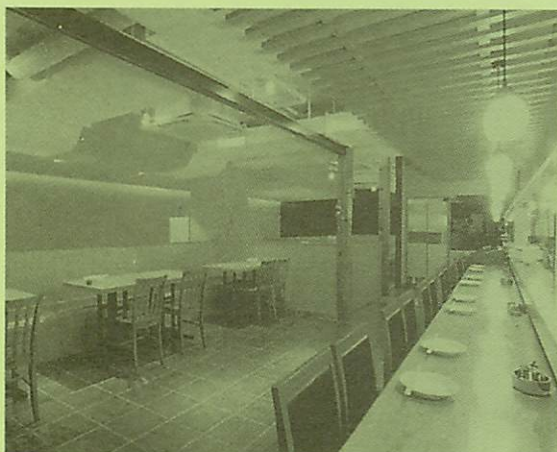
BISTRO 八詩

渋谷の喧騒を忘れそうな和める空間で、旬の素材を。

ごまや

BISTRO ごまや

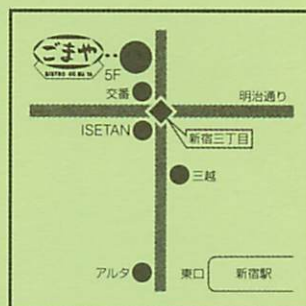
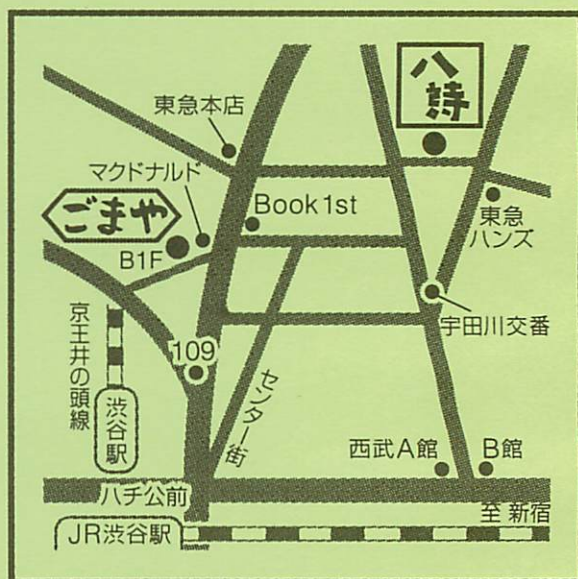
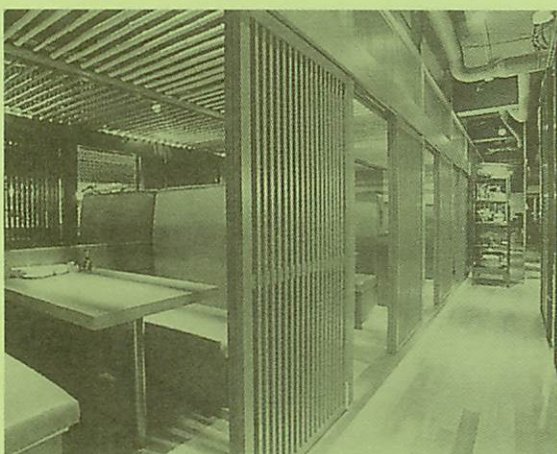
渋谷の真ん中と思えない、まるで大人の隠れ家。



ごまや

BISTRO ごまや・新宿店

素材にこだわった料理とひとときを、和みの空間で。



東京都新宿区新宿3-4-1
カルムビル5F
tel:03-5269-8158
Open 11:30 ~ Last Order 22:45
年中無休 (120席(個室大小12部屋))



おすすめメニュー

手造り胡麻豆腐
季節の野菜で胡麻よごし
豚肉ニンニク味噌巻き
生タコの青のり揚げ
ピリッと胡麻の葉炒飯
生ウニたっぷりスパゲッティー

JACKPOT GROUP OFFICE ジャックポットグループ・オフィス
〒155-0032 東京都世田谷区代沢5-35-8 岩瀬ビル1F
TEL 03-3413-9555 / FAX 03-3412-7332 www.jack-pot.co.jp